

ヤコブの手紙4章「みこころの後ろに隠れるへりくだり」

1A 言い争い 1-12

1B 戦う欲望 1-10

1C 貪り 1-3

2C 世の友 4-6

3C 悔い改め 7-10

2B 兄弟の悪口 11-12

2A 商売 13-17

1B 大言壮語 13-16

2B 行わない罪 17

本文

ヤコブの手紙 4 章を開いてください。私たちは、ヤコブが兄弟の間にある言い争いを問題として取り上げているのを 3 章から読んでいます。3 章では、私たちの舌が、いかに制しがたいからだの器官であるかを語りました。災いをもたらします。そして、知恵について語りました。知恵のように見えるものでも、苦々しいねたみや利己的な思いがある時は、その知恵は偽りであり、地上のもので、肉的で、悪魔的であると論じました。まことの知恵は、清いものであり、平和、優しさ、憐れみなどの良い実が結ばれる、ということを知りました。

1A 言い争い 1-12

そして 4 章に入ります。ヤコブは続けて、人々が言い争うことの問題を取り扱いますが、それは心に、争うものがあるからだということです。

1B 戦う欲望 1-10

1C 貪り 1-3

¹ あなたがたの間の戦いや争いは、どこから出て来るのでしょうか。ここから、すなわち、あなたがたのからだの中で戦う欲望から出て来るのではありませんか。

ここで話している、「戦いや争い」は「あなたがたの間の」と言っているとおり、キリスト者の中で起っている戦いや争いです。それは、「あなたがたのからだの中で戦う欲望」から出て来ていると言っています。3 章で、これらの知恵が「肉적」であるとありました。私たちはとかく、使徒たちの生きている時の初めの教会は、よほど靈的であると思ってしまうがちですが、手紙の中にこのように書かれているということは、相当、醜悪な言い争いが教会で起こっていたようです。

コリントの教会でもありました。「I コリ 3:3 あなたがたは、まだ肉の人だからです。あなたがたの間にはねたみや争いがあるのですから、あなたがたは肉の人であり、ただの人として歩んでいくことにならないでしょうか。」ガラテヤの教会でも起こっていました。「ガラ 5:15 気をつけなさい。互いに、かみつき合ったり、食い合ったりしているなら、互いの中で滅ぼされてしまいます。」そして、肉の行いとして、「敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ」と続きます(5:20-21)。からだの中にある欲望が、言い争いを引き起こしています。小さな確執でしたがピリピの教会にもありましたし、コロサイの教会にも互いに不満を言わないで、赦し合いなさいとあります。

² あなたがたは、欲しても自分のものにならないと、人殺しをします。熱望しても手に入れることができないと、争ったり戦ったりします。自分のものにならないのは、あなたがたが求めないからです。

言い争いの背後にあるのは、「欲する」ことなのだと思います。十戒の最後の戒め、「欲しがってはならない」を破っているのです。午前礼拝でお話したように、自分が神に愛されて、恵みを受けていれば、そこに満ち足りているので、貪りから守られます。しかし、そういった満ち足りた心がなければ、人のそのままの姿は、飽くことのない餓鬼のように、欲して仕方がないのです。

そして、欲すると、「人殺しをします」と言っています。これが、午前礼拝で例として挙げた、カインです。主に受け入れられることを欲したために、受け入れられた弟のアベルを殺してしまったのです。イエス様は、兄弟のことをばかと言ったら、人殺しをしているのと同じであると語られましたね。その人が消えることを欲しているのですが、すでに殺しているのと同じです。そして、「熱望しても手に入れることができない」と、争ったり、戦ったりします。他の人が持っている物や栄誉、評判など、自分も欲しいのですが、得られていないので、相手に挑みかかって、炎上させて、その利己的な思いを満たそうとします。

そこには根本的な問題があります。そうやって奪い取ったり、争ったりしても、いつまでも自分のものになっていないのです。問題は、「求めている」ということにあります。ヤコブは、主イエスが言われたように、神は父として、惜しみなく与えてくださることを教えました。この、神が父となってくださっているところにある安心感や満ちしが欠けているのです。子は父に求めます。そして、父はその願いをかねます。その関係が欠如しています。

³ 求めても得られないのは、自分の快樂のために使おうと、悪い動機で求めるからです。

求めること、祈ることさえが、自分が欲していること的手段にしていることがあります。午前礼拝でじっくりと、この部分を学びました。求めることが、子が父に対して願うことであり、あるいは民が王の前に出て願うことであって、自分の欲することをかなえる道具ではないのです。

そして、ここでの「求める」は、祈りというかたちで求めることだけでは、なさそうです。快樂のために使おうとしているので、貪欲に駆られて、いろいろ求めているという、一般的なことも話しているのかもしれませんが。自分が獲得したと思っても、心は満たされません。だから、求めていることが、いつまでも得られないのです。

そして、靈的に幼い人、言い争いをしている未熟な信者は、ちょうど、靈的に栄養失調になっています。人々は栄養がからだに足りなければ、それだけ人から奪おうと躍起になります。同じように、靈的に栄養が足りないと、言い争いが多くなるのです。しかし、求めても得られないのです。

2C 世の友 4-6

⁴ 節操のない者たち。世を愛することは神に敵対することだと分からないのですか。世の友になりたいと思う者はだれでも、自分を神の敵としているのです。

言い争いがあることを、心の中の戦う欲望であると、1 節から 3 節で話しました。ここでは、世の友になっているからだという問題を取り上げています。私たちの間に秩序の乱れが起こるのは、キリスト教的な装いをしながら、世の価値観が入り込んでいるからです。世においては当たり前に行われていることでも、キリスト者の間ではあってはならないのです。世の友になれば、神の敵であり、神の友として生きれば、世と交わることはできません。

ヨハネも第一の手紙で、世と神のどちらも愛することはできないことを話しました。「I ヨハ 2:15-16 あなたは世も世にあるものも、愛してはいけません。もしだれかが世を愛しているなら、その人のうちに御父の愛はありません。すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢は、御父から出るものではなく、世から出るものだからです。」

初めに、「節操のない者たち」という強い言葉を使っています。新改訳の以前の訳では、「貞操のない者たち」と訳していました。これが直訳に近いです。姦淫を犯している者ということです！これまで、兄弟たち、愛する兄弟たちと呼んでいましたが、神を愛しているからこそ互いに兄弟なのであり、神ではない世を愛しているのであれば、二心になっていて、二人以上の女、あるいは男と付き合っているようなものだと言っているのです。旧約聖書では、偶像礼拝者を靈的姦淫と教えていました。神とイスラエルの民とは夫と妻の関係であり、他の神々に仕えるのはその契約違反だということです。この表現をヤコブは使っています。

ここで大事なことは、世の友になっていることが問題であって、世から分離することを教えているのではないことです。私たちは、キリストにあって世に遣わされている者たちです。キリストが神から世に遣わされたように、世にキリストから遣わされています。ヨハネ 3 章 16 節には、神が世を愛された、とあります。それは、世にあって人々が滅ぶべきところを、神はその罪人を愛しておられて、

それで御子を罪の供え物として世に遣わされた、ということです。敵をも愛されるということです。神のみを愛して、世から聖め別たれているからこそ、世にあって人々の間に住めるのです。自分が世の影響を受けるのではなく、自分自身のうちに住まわれるキリストによって、世に影響をかえって与えるのです。世の光です。

しかし、世の友になってしまっている人を見ると、世を愛していることを、神のみこころであるかのように正当化していることがよくあります。極端な例で話せば、自分が歌舞伎町で伝道することに召されて、それを行っているのと、歌舞伎町でお酒を飲んだり、女遊びを求めてそこに行ったら、真逆のことです。でも、女遊びをしたいただけなのに、「神は彼女たちを愛していて、ここにいるのは、神のみこころなのだ」といったら、偽っています。ここまで極端でなくとも、家族のために尽くすのが神のみこころといいながら、神への愛がどこにいったか分からなくなることがあります。教会に献金するためだと言いながら、日曜日に仕事をして礼拝を怠っていたら、本末転倒です。キリストを主としてあがめている中でこそ、初めて、世に遣わされることができるのです。

⁵それとも、聖書は意味もなく語っていると思いませんか。「神は、私たちのうちに住ませた御霊を、ねたむほどに慕っておられる。

ここの鍵括弧の言葉は、聖書の直接の引用ではないです。おそらくヤコブは、聖書全体に流れている教えを、このように書いているのだと思います。神は私たちのうちに御霊を住まわせてくださいました。御霊によって、神と私たちは交わることができます。その御霊を、父なる神はねたむほどに慕っておられます。つまり、私たちのうちでは、激しい葛藤が起こるのです。世と神を同居させているのですから、激しい妬みを神は抱かれるのです。

これは言い方を変えたら、それで神はあなたを熱情的に愛しておられるということなのです。あなたは、神だけのものになってほしいと願われています。それが分かっていないので、自分の心が空虚になり、それを他のもので埋めようと思って、貪ったり、奪い取ったりしようとして争うのです。

⁶神は、さらに豊かな恵みを与えてくださる」と。それで、こう言われています。「神は高ぶる者には敵対し、へりくだった者には恵みを与える。」

神は、さらに豊かな恵みを与えようとしておられる方なのです。恵みによって、私たちを救ってくださった方は、今、この地上で生きている時もさらに恵みを豊かに与えたいと願われています。しかし、それを妨げているのが高ぶりです。ヤコブ4章全体のテーマは、ここにあります。神のみこころを自分の生活の前に持ってこなければいけないのです。自分の意志ではなく、神のみこころを一番前に持ってくるのです。そして、自分はそのみこころの背後に隠れるのです。

言い争っている時は、神を求めることはそっちのけです。そして自分の利益のために求めている時も、神のみこころはそっちのけです。神を神として、この方の御前にひれ伏して、それで願い求めるのですが、自分の欲していることが先にあって、それで神に聞き従ってもらおうとさえしているのです。そして、世の友になっているのも、まさに自分が先になっているのです。だから今、高ぶりの問題をヤコブは取り上げています。

主の前にへりくだった時に、初めて恵みが注がれます。恵みとは、受けるに値しない者が受ける神の好意です。受けるに値しない者であることを認める時に、主がそれでも愛して、祝福を注ぐことを惜しまないのです。

3C 悔い改め 7-10

⁷ですから、神に従い、悪魔に対抗しなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります。

ここから、ヤコブが言い争いの背後にある問題の三つ目を取り上げています。内にある戦いの欲望という肉の問題、それから神に敵対する世の友になっている問題を取り上げました。三つ目は、悪魔との戦い、霊の戦いがあるということです。人々が高ぶっている時に、それは悪魔が誘導していると言って過言ではありません。悪魔は高ぶりの罪を犯して、それで墮落しました。いと高き方のようになろうとして、それで天から落とされました。その高ぶりに、彼はエバを誘い込みました。

霊の戦いの時に、第一にしなければいけないのは、神に従うことです。「従う」という言葉が大事です。自分の欲することを行っている中では、悪魔の餌食になっています。しかし、自分の意志を神に服従させるのです。どんなに自分は、これをやりたいと強く願っても、それでも、神がこう言われているのだからという理由だけで、服従するのです。そうすれば、神の権威の下にいますので、神が自分に代わって、戦ってくださるのです。

そして第二に、悪魔に対抗します。神に従う時に、あらゆるそそのかしと惑わしで、私たちがそこから出て行かせようとしています。おびきよせ作戦、陽動作戦を取るのです。もし、私たちが神に従ったら、彼が負けてしまうのは決定的だからです。いや、すでに悪魔は、キリストの死とよみがえりで、その牙が抜かれているのです。無力化されており、滅びが定められたのです。だから、今は、力がないのに、ただ暴れているだけなのです。ですから、神に従えば、悪魔は逃げ去るしかありません。

フェイスブックのタイムラインで、あるイラストが流れてきたのを見て感動しました。今でも、はっきり覚えています。幼い女の子がひざまずいて、手を組んで祈っている絵でした。そこにこう書いてあります。「サタンは、最も弱い者がひざまずいて祈る時に、震えあがる。」自分がいかに小さい者、弱い者と思っても、それは関係なのです。自分がいかに強いかが問題ではないのです。いや、その強さが、実は霊の戦いにおいては欠陥になるのです。霊の戦いで大事なものは、ひざまずくこと、

神に従うこと、へりくだることなのです。そうしたら、どんな強い人でも成し遂げるこのできないことを、神が成し遂げてくださいます。

⁸ 神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます。罪人たち、手をきよめなさい。二心の者たち、心を清めなさい。

自分が神に近づいたら、神が近づいてくださいます。しかし、それは、自分が罪人であることを認める時です。神に近づいて自分が罪を認めたら、主が豊かに清めてくださいます。「ヘブル 10:22 心に血が振りかけられて、邪悪な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われ、全き信仰をもって真心から神に近づこうではありませんか。」

罪人が手を清めるとは、二つの意味合いがあります。旧約において、祭司たちは洗盤で手足を洗います。そうして聖所の中に入ります。同じように、神に近づくのですから、手を洗いなさいという比喩的な意味です。そしてもう一つは、自分が罪を行っているその手を、その罪から離れなさいということです。汚れたものに触れている手を清めなさいということです。そして、二心です。一方で神に仕えているつもりで、他方で世を愛しています。この二心を清めていただくのです。神のみに合わせるよう、悔い改めます。

⁹ 嘆きなさい。悲しみなさい。泣きなさい。あなたがたの笑いを悲しみに、喜びを憂いに変えなさい。

嘆き、悲しみ、泣くのは、自分の罪に対してです。何事もなかったかのように、笑い続けて、喜んでいたら、みこころにかないません。罪の対する悲しみを抱きます。イエス様が、語られたようにです。「ルカ 6:25b 今笑っているあなたがたは哀れです。あなたがたは泣き悲しむようになるからです。」「6:21 今泣いている人たちは幸いです。あなたがたは笑うようになるからです。」

¹⁰ 主の御前でへりくだりなさい。そうすれば、主があなたがたを高く上げてくださいます。

6 節で語ったことを、ここでまとめています。へりくだる者に神は恵みを与えますが、そのへりくだる過程を、7 節以降で語っていました。神に服従して、悪魔に対抗することです。悪魔の言いなりになって高ぶっているところから逃げ去ります。そして神に近づきます。その近づく時に、豊かな恵みがあるのですが、罪を行っている手を清めます。二心を清めます。そこには、罪に対する嘆き悲しみがあります。それを、大したことではないとして軽々しくあしらってはいけません。

こうして主の前でへりくだります。そうすると、神が高く上げてくださるんですね。私たちは、恵み豊かな神を知らないと、自分自身で高くしていこうとしてしまうのです。けれども、自分で高くしようとすると、低められるのです。自分で低くしていくと、神が高くなるのです。それは、自分が低くなっ

ている時に、自分ではなく神があがめられるからです。自分を通して、キリストが大きく働くことがおできになるからです。

2B 兄弟の悪口 11-12

こうして、自分の心にある戦う心について、また世との関わりについて、また霊の戦いについて見てきました。こうやって、へりくだることによって、当然、兄弟との言い争いは少なくなります。次にヤコブが取り扱うのは、さばく問題です。

¹¹兄弟たち、互いに悪口を言い合ってははいけません。自分の兄弟について悪口を言ったり、さばいたりする者は、律法について悪口を言い、律法をさばいているのです。もしあなたが律法をさばくなら、律法を行う者ではなく、さばく者です。

兄弟の悪口を言い合ってはいけないのは、同じ兄弟だからです。兄弟ということは、同じ神から生まれた者たちです。神が父として、御霊によって子を生んでいかれました。ですから、同じ神の家族として、私たちはつながっています。今の悪い時代は、一人一人が個人であって、ばらばらになっていることです。そうではありません、同じ神から生まれた者であり、同じ神を父と仰いでいるのです。ですから、たとえ不満があっても、自分につながっている人を無下に裁くことはできません。

ここでは、「律法をさばいている」と言っています。これは、自分自身のように隣人を愛しなさいというイエス様の命令であり、また、わたしが愛したように、互いに愛し合いなさいという命令のことを指しています。愛し合いなさいという命令があるのに、それがいかに間違っているのか、裁いていることになるのです。自分が神の命令に対して、上段構えで、「あなたは知恵がない。愛し合いなさいなどと言っているから、教会が間違った方向に行くのだ」と批判しているのです。

「律法を行う者ではなく、さばく者です」と言っています。律法を行うとは、律法が神から来たものであり、その権威の下に自分を置くことです。自分が同意できなくとも、自分の主がそう命じているのだから、それだけの理由で行います。

聖書とは、言い争いをするための道具でもなく、そうやって批評する対象でもないのです。牧者チャックが若くして牧会をしていた時、教会の中に、議論を挑みかかる異端的な教えを持ち込んでいた者たちが入ってきたそうです。彼らは、巧みに多くの聖書の箇所を引用します。それらを、そのまま受け入れていったそうです。けれども、公式に立場を明らかにする時には、はっきりと語り、その者たちが怒りました。自分たちに同意していると思っていたのに、そうでなかったからです。

なぜ、議論し返さなかったのか？それは、「聖なる神のことばを、人間の言い争いのために使いたくない。」とのこと。神のことばは、聖なるものです。それを、自分たちで裁くような道具に使って

はいけないとのこと。聖書は、文字通り、聖なることばです。これらのことばを、自分が神への恐れをもって、従順になり、行っていくものなのです。

¹² 律法を定め、さばきを行う方はただひとりで、救うことも滅ぼすこともできる方です。隣人をさばくあなたは、いったい何者ですか。

さばかれる方は主おひとりです。ですから、人を救うのも滅ぼすのも、主が行われることです。隣人について、とやかく言っているということは、自分が神のところに立っていることに他なりません。「いったい何者か」とヤコブは問いかけています、要は高ぶりなのです。

自分の心の中にあることを、告白しますと、私は、以前は、教会の牧師や宣教師たちに批判的でした。けれども、自分が実際に、アメリカから日本に戻ってきて、宣教の働きを始めたら、その大変さが身に染みて分かりました。そして、すべての牧師と宣教師を尊敬することができました。そこで悟ったのは、「主の働きをするのは、主ご自身が召して、その人を立てなければ、できようがない。」ということです。つまり、自分が批判しているのは主が立てた人々であり、主ご自身を裁いている、ということなのです。

もちろん、何か間違いがあれば、それを容認しなさいということではありません。けれども、聖書には、主に立てられた人々も多くの間違いをしているということです。その間違いの中でも、それで主はその弱い器を恵みによって用いて、ご自分のわざを行われるのです。そこにおける尊敬です。その人を尊敬するというよりも、その人が主に従順になっている時に、主がそこにおられるというところにある尊敬です。

2A 商売 13-17

1B 大言壮語 13-16

これで、兄弟たちに悪口を言うことについてヤコブは語り終えます。3章から語っていました。次から5章前半にかけて、金もうけについて語っていきます。すでに、「富んでいる人は、自分が低くされることを誇りとしなさい。」と教え諭していました(1:10)。けれども、悪口の問題から、金もうけに話題は移っていますが、そこにある教えは通底しています。

¹³「今日か明日、これこれの町に行き、そこに一年いて、商売をしてもうけよう」と言っている者たち、よく聞きなさい。¹⁴ あなたがたには、明日のことは分かりません。あなたがたのいのちとは、どのようなものでしょうか。あなたがたは、しばらくの間現れて、それで消えてしまう霧です。

ここの箇所を見て、すぐに思い出すのは、イエス様の金持ちの喩えのことです(ルカ 12:15-21)。豊作だったので、倉を拡大して、穀物を底に貯蔵して、これから先何年も安泰だから、食べて飲んで

で、楽しもう。」と言っています。けれども、実は、今夜その魂が取り去られる、という内容です。ヤコブは、同じことを話しています。

ここで問題視しているのは、計画を立てていることではありません。お金をもうけることについて禁じているのでもありません。そうではなく、明日のことはわからないという現実を無視していることです。お金自体は悪いものではないのですが、お金を神のように頼りにしていくことが問題なのです。お金にはそういった魔力があります。富にも主にも仕えることはできないとイエス様は言われましたが、富が、主なる神のように頼りになると惑わされてしまうのです。それに基づいて、自分の行動を決めていること自体が、かなり危ういのです。

ヤコブは、「あなたがたのいのちとは、どのようなものでしょうか。」と言っています。それは霧のようにはないのですが、だからこそ、そのいのちを何のために用いるのかが問われています。主のために、そのいのちを失えば、いのちを救うとイエス様は言われていますね。いのちを、永遠のこのために用いるのです。私があるキリスト者の結婚で祝辞の一言を頼まれましたが、他の人たちが「末永くお幸せに」とあいさつしていました。私は、「短いので、大切にしてください」と逆のことを言ったのです。はかないからこそ、短いからこそ、最優先すべきことを優先させるのです。

そして、そのいのちのために、財のことで費やしてどうするのか？ということなのです。ある若い夫婦が離婚に危機にありました。家を購入すべきかどうかについて意見が分かれたのだと思います。けれども、二人ともキリスト者となりました。離婚の危機は解消されました。とても簡単です。家を所有することについて、二人とも拘らなくなったからです。物がなくなっても、同じぐらい質の高い結婚生活、家族の生活は営めるのです。

¹⁵ あなたがたはむしろ、「主のみこころであれば、私たちは生きて、このこと、あるいは、あのことをしよう」と言うべきです。¹⁶ところが実際には、あなたがたは大言壮語して誇っています。そのような誇りはすべて悪いことです。

いのちのはかなさを知っていることが必要です。今、生きているのは主の憐れみによるのであって、それ以上でも、以下でもありません。ですから、主のみこころであれば、私は生きています、という告白の中で、日々の計画を立てていくのです。伝道者の書で、ソロモンが徹底的にこのことを教えていました。財をためていくことだけでは、いかに空しいかを教えています。自分がためた財は、息子の代で無駄に使われることのむなしさなどを語っています。だから、日々の生活を生きて、家に帰って妻がいて、ご飯を食べることが、神に与えられた楽しみだとも言っています。そして神を恐れ、命令に従うことが人のすべてだと、結論付けています。

しかし、そのような主のみこころを重んじないで、自分があるれをする、これをすると誇っていること

自体が悪であると断じています。ですから、ここにおいて兄弟のことを悪くいうのと同じ問題なのです。主のみこころを前に持つてくるのではなく、自分自身のことを前に持つてきているという問題です。それは高ぶりであり、誇りであり、破滅への道です。

2B 行わない罪 17

¹⁷ こういうわけで、なすべき良いことを知っていながら行わないなら、それはその人には罪です。

私たちは、罪というと、何かを行うことだと考えます。言い換えれば、何かを行わないと、罪を避けられるから安全だと思えます。けれども、良いことだとわかりながら行わないことも罪なのです。行わない罪があるのです。例えば、預言者サムエルが、イスラエルの民のために、彼らの指導者として祈らないことで、主に罪を犯したくないことを話しました。

けれどもヤコブは、「こういうわけで」と言っています。商売をして、これこれこういうことをしようと大言壮語しているけれども、なすべき良いことを知っていながら行わない、というのはどういことでしょうか？これは、第一に、貧しい人への憐れみでしょう。ヤコブは、手紙の中で、行いのない信仰は死んでいることの例として、貧しい人への憐れみを語っていました。富んでいること自体が罪ではなく、その富に頼っているために、主の命令である分かち合うこと、施しをすることに一切、富を使っていないことが罪なのです。

富というのは、私たちが主に従わなくさせる力を持っています。イエス様が、王子の披露宴の時に、王が招いているのに、その招待を拒んでいる喩えを語られました。「マタ 22:5-6 ところが彼らは気にもかけず、ある者は自分の畑に、別の者は自分の商売に出て行き、残りの者たちは、王のしもべたちを捕まえて侮辱し、殺してしまった。」商売に出ていくことによって、その招待を拒んでいるのです。迫害をする者たちもいますね。インドでは、ヒンズー教の過激派がキリスト教会の建物に放火をよくする話を聞きます。それはひどい迫害だと思うでしょうが、商売に出かける、つまり、自分のお金のことで、イエス様のための披露宴を父なる神が用意されているのに、その招きに応じないのも、同じように拒んでいて、重い罪なのです。

私たちが、主に呼ばれているのに、これこれをする、あれをするとすでに計画を立てていて、「みこころならば、自分は生きていて」というへりくだりが、欠けていることはないでしょうか？これが、大きな問題なのです。主のみこころを自分の歩みの前に持つてこないといけません。そのためには、手を清めて、心を清めて、時には泣いて罪を悲しまなければなりません。

主のために、立ち止まることを決めてみましょう。自分が生きているのは、主の憐れみによるのだと知る時を作りましょう。そして、今の生活とその計画が正しいのか、確かめてみましょう。そこに良心の清めがあるかどうか？平安があるかどうか？楽しめましょう。